

中国北方の先史「城壁」集落

The Prehistoric Settlements with “City Wall” in Northern China

王 妙 発

Miaofa WANG

Abstract

Like in the Yellow River region and the Yangtze River region, a number of prehistoric settlements with “City Wall” have been found in Northern China, mainly distributed over the Central Inner Mongolia, Southeastern Inner Mongolia, Western Liaoning, and Qinghai Plateau. The walls that lie in Central Inner Mongolia are about the same time as those of Longshan Culture (about 26–20 century B.C.) in the Yellow River region. The walls that lie in the Southeastern Inner Mongolia and Western Liaoning are mainly the relics of lower layer of Xiajiadian Culture (about 21–16 century B.C.) and those in the Qinghai Plateau are the relics of Kayue Culture and Tangwang Culture (about 10–7 century B.C.).

Although a few of these relics of the New Stone Age or the Bronze Age have possibilities of being considered as cities, no one has been affirmed yet. Most of them are the relics not associated with the word of “City”.

一 前 言

ここで言う中国の「北方」は黄河流域より北側の広大な地域を指す。

黄河流域と長江流域では、周知の通り、数多くの「城壁」のある先史時代の集落の遺跡が発見されている。黄河流域と長江流域の他に、中国北方の他の地域でも「城壁」のある集落の遺跡が多数発見されている。それらの城壁集落の分布する地域は、主に内モンゴル高原の南部の岱海を中心とする地域、中国東北地域の南西部の西拉木梭河、陰河、英金河及び大凌河流域（内モンゴル自治区の南東部と遼寧省西部との接続する地域）、また青海高原という三つの地域である。これらの城壁集落の年代については、内モンゴル高原南部にあるものは大体、黄河流域の新石器時代の竜山文化時代（約紀元前26世紀–20世紀）に相当し、東北地域にあるものは主に青銅器時代の夏家店下層文化（約紀元前21世紀–16世紀）の遺跡であり、青海高原内にあるものは青銅器時代の卡約文化と唐汪文化（約紀元前10世紀–7世紀）の遺

跡である。

本稿はこれらの中国の北方にある新石器時代と青銅器時代の城壁集落に対して集落地理学の角度からの検討である。結論としてはこれらの城壁集落の中に「都市」として判断したのは一ヶ所もなく、数ヶ所は「都市」として「可能性がある」に止まるだけである。そのほかの多くの遺跡は「都市」という言葉を連想させることがあり得ない遺跡である。また、その中で涼城園子溝遺跡は城壁がなくとも、報告者がこの遺跡を城壁のある「城跡」に似た集落の一つであり、地形が険しいため「壁を造る必要がない」と報告している⁽¹⁾。筆者からすると、この見方は大変意義があると思う。城壁があるかないかは集落性質の位置付けに根本的意義を持たないとは筆者の一貫している主張である⁽²⁾。この例は逆に、城壁の有無を都市（集落性質）の判断基準とするのが如何に事実から逸脱したかを示していると思う。

本稿の検討する方法についていくつかの説明を行っておきたい。

その一、「都市」と認定する基準に関することである。前述したように、本稿では「都市」として認定する集落は一ヶ所もない。だが、この認定の「基準（定義）」については、別の論文で詳しく検討したことがあり、ここではその「結論」を引用する⁽³⁾。

都市とは、非季節的に定住する人口が住民の圧倒的多数を占め、二種類以上の非季節的産業機能を持ち、またその一つは中心地機能がある、人間の集落である。

その二、「準都市集落」の概念に関することである。簡単に言うと、「準都市集落」とは、都市と村落（季節的産業機能を持つ集落）の間の「中間タイプ」である。その主な特徴は非季節的産業機能を持つが、多種類の集落機能（中心地機能）を持たないことである。この「準都市集落」の概念に関しても、筆者が別の論文で詳しく検討したことがあり、ここではその「結論」を引用する⁽⁴⁾。

準都市集落とは、単一或いは二つ非季節産業機能を持ち、中心地機能がない人間の集落である。

その三、人口推算方法に関することである。本稿の人口算定の方法についても筆者が別の論文で詳しく検討したことがあり、ここではその「結論」を引用する⁽⁵⁾。

対象の集落は一般に明確な居住区の範囲のある場合に、1㎡に0.025-0.034人と推定する。また、明確な居住区の範囲がはっきりしていない場合に、1㎡に0.008-0.01人と推定する。

(1) 田广金：「内蒙古长城地带石城聚落址及相关诸问题」、『纪念城子崖遗址发掘60周年国际学术讨论会文集』、齐鲁書社1993年11月。

(2)(3) 郁越祖と筆者共著：「關於『都市（城市）』概念的地理学定義考察」、『歴史地理』第10輯、上海人民出版社1992年7月。

(4) 拙著：『略論似城聚落』、『地理科学』12卷1期、科学出版社1992年、北京。

(5) 拙著：『黄河流域的史前聚落』、『歴史地理』第六輯、上海人民出版社1988年。

本稿では可能な限り、集落の立地・環境の特徴・集落の規模・集落の人口の推定及び集落の類型区分などの角度から各城壁のある集落について検討を展開していきたいと思う。

二 内モンゴル高原南部にある「城壁」集落

内モンゴル高原の南部に、岱海という名前の内陸湖がある。この岱海を中心として、北東-南西方向の盆地がある。盆地の標高は1,230-1,350 mで、東西の長さは約50 km、南北の幅は約17 kmである。この盆地及び周辺地域では石で造られた城壁を持つ先史集落が多数発見されている。

1. 老虎山⁽⁶⁾

老虎山城跡は内モンゴル自治区の涼城县に位置している。城跡は周りの地形が箕の形で、西北が高く、東南が低くて、石で築かれた壁が周辺に張り巡り、その年代は竜山文化時代である。

石壁（城壁）は山の地形に沿って建てられ、上が狭く、下が広く、不規則な三角形となっている。北壁は残っている長さが約600 mあり、南西の壁は405 mぐらい残っており、面積はおおよそ130,000 m²である。北側石壁の内側に約5 m離れて別に1つの平行する石壁の跡があり、山の斜面の険しい部分にまた別の壁をかばう石壁がある。南西側の石壁は険しい尾根の上に建てられ、尾根の外に深い溝があり、もとは護壕があったと考えられる。石壁の基礎は幾重にも重なり合う黄土で、その厚さが約1.4～1.9 mで、幅が5 mで、その上に石壁が建てられたのである。恐らく先ず土で建ててから、その外を石で包んだと思われる。山頂は平らに削られたようだが、山頂にある平らな台の辺に約40 mの城跡がある。この小さな方城の北側に二つの城門があり、門内の中側に長方形の石小屋の敷地があって、門番詰め所の跡ではないかと推測される。小さな方城の中側の最も高いところに石敷きの建物の遺跡があり、祭祀用か見張り台かと見られている。城は山の地形に沿って階段のように築かれて、合計八階がある。各階段に、2-3軒の家屋の跡が列に並び、それは山の斜面に沿って数列に並んでいる。家屋の方向は一樣ではなく、東北側の家屋が東南に向いて、西北側の家屋が多数、東に向かう。家屋の多くは平面が「凸」字型の竪穴式建築で、2-3軒が1組となり、組と組がほ

(6) 内蒙古文物考古研究所編：『岱海考古（一）——老虎山文化遺址發掘報告集』、科学出版社2000年9月。

田广金：「内蒙古长城地带石城聚落址及相关诸问题」、《纪念城子崖遗址发掘60周年国际学术讨论会文集》、齐鲁書社1993年11月。

田广金：「内蒙古中南部龙山时代文化遺存研究」、《内蒙古中南部原始文化研究文集》、海洋出版社1991年。

田广金、郭素新：「北方文化与草原文明」、《内蒙古文物考古文集第二辑》、中国大百科全书出版社1997年7月。

卢可可：「中国史前城址的区域与类型研究」、《中国历史地理论丛》1998年3期。

ば均等距離で分布している。これらの家屋は一夫一妻制家屋ではないかと指摘されている。また、ある家屋の中で土器かまどが発見されている。その家主がすでに土器製造を職業としているのではないかと考えられる。つまり専門的分業はすでにあったかもしれない。そうすると、造られた製品は「商品」の性質を持つ可能性が高い。遺跡南西側の石壁の外にはかまどが多く、また水源に近いことから、集中する土器作業場ではないかと考えられる。かまどは巨大で、直径がおよそ1.5 m以上のもあり、今まで判明された先史時代のかまどの中で最大規模のものである。集中する墓地がまだ発見されていないが、北壁の内側で破損した竪穴式の墓は三基発見されており、頭が西に向かって埋葬されている。

人口の推定：

集落の平面の形が不規則で、長さも精確ではない。報告される約130,000 m²という面積はすべて明確な居住区だと見なして試算すると、可能な住民の数はおよそ3,200－4,400人になる。この辺りが今では農業地区ではないことを考えれば、新石器時代でもこの辺りが農業地区ではなかったとの認識はさほど間違っていないと思われる。つまり、集落の周りに耕作に適する土地が実に多くないと考えるならば、人口と土地の面積上の比例関係は農耕地区のそれと異なるのである。牧畜業が主要産業であれば、人口と土地面積の比例関係は放牧範囲との間の比例関係になるはずである。このため、上述の3,200-4,400人の推定は恐らく多すぎると思われる。

集落機能の推測：

石壁の山城について、防衛の機能が際立つと報告されている。その他集落機能の推測に役に立つ遺物と遺跡の報告は十分にはなされていない。祭祀遺跡、集中する土器作業場および最大規模の先史のかまど遺跡、家屋の近くに作られたかまど（今まで判明された先史時代の最大規模のかまどがここで発見されている）など、つまり専門的に分業されていた可能性は否定できない。老虎山城跡は「岱海石城跡集落遺跡群」の中で代表的遺跡であり、これら同類の石壁城跡の中で最大の面積を持つものである。もしも本当に「集落群」であれば、この老虎山城跡は中心位置に置かれ、集落の中心地機能が一種類だけに止まらないと思われる。この「岱海石城跡集落遺跡群」の中でもし都市が存在するならば、まず老虎山城跡はその可能性が最も高いだろう。

田広金と郭素新氏はこの城跡が昔の「方国」だった可能性も言及した⁷⁾。そうすると集落はまた行政上の中心地機能を持つ可能性もある。判断に使える資料がまだ不足しており、その上人口の推定にも問題があって、都市としての可能性がとても大きいと思われるが、この城跡は都市として認められるかどうかは、判断を留保する。

2. 西白玉⁽⁸⁾

西白玉城跡は内モンゴル自治区涼城県にある。水泉川の西側で、老虎山城跡から5 km西にあり、老虎山城跡と同じように蛮汗山の南麓に位置している。標高1,430-1,542 m、かなり高い山の頂上にあり、遺跡の総面積は90,000 m²くらいと報告されている。報告によると、「城跡所在の地形、その地形と石壁の形及び建築方法などはいずれも老虎山城跡に似ている」という。山頂の方形城跡から坂の斜面にそって建てられた東壁は245 mが残っており、城跡全体の規模は老虎山城跡の二分の一ぐらいに相当する。凸形及び方形の住居跡が発見され、それらは6 m²-10 m²くらいである。

人口の推定：

遺跡の総面積は90,000 m²くらいと報告されているが、城跡の規模が老虎山城跡の約半分との説明もあるため、城壁に囲まれた範囲を65,000 m²として計算し、その全体を明確な居住区と見なすと、可能な人口数は1,600-2,200人くらいである。

集落機能の推測：

資料が少ないので、推測しにくく、判断を留保する。ただし都市である可能性は非常に少ないと思われる。

3. 阿善⁽⁹⁾

阿善城跡は包頭市東15 kmの阿善溝門の東に位置し、北に大青山があり、南が黄河に面する。東、西二つの台地に分かれ、両者の距離が250 mぐらいで、ともに石壁に囲まれ、年代は阿善文化第3期に属する。二つの台地の間に膝蓋溝があり、その膝蓋溝の水が南へと黄河に流れ込む。台地は黄河の水面より81-96 mぐらい高い。

東台地の石城跡は不規則な形で、東北から南西にわたって、長さ260 mで、西北から南東の長さ（幅）が120 mである。北壁に1.5 m幅の入り口（城門？）の跡のような開け口があり、

／（7）田广金、郭素新：「北方文化与草原文明」、《内蒙古文物考古文集第二辑》、中国大百科全书出版社1997年7月。

内蒙古文物考古研究所編：《岱海考古（一）——老虎山文化遗址发掘报告集》、科学出版社2000年9月。

（8）（10）（11）（12）（13）（14）（15）田广金：「内蒙古长城地带石城聚落址及相关诸问题」、《纪念城子崖遗址发掘60周年国际学术讨论会文集》、齐鲁书社1993年11月。

田广金：「内蒙古中南部龙山时代文化遗存研究」、《内蒙古中南部原始文化研究文集》、海洋出版社1991年。

田广金、郭素新：「北方文化与草原文明」、《内蒙古文物考古文集第二辑》、中国大百科全书出版社1997年7月。

卢可可：「中国史前城址的区域与类型研究」、《中国历史地理论丛》1998年3期。

（9）内蒙古社科院蒙古史研究所等：「内蒙古包头市阿善遗址发掘简报」、《考古》1984年第2期。

田广金：「内蒙古长城地带石城聚落址及相关诸问题」、《纪念城子崖遗址发掘60周年国际学术讨论会文集》、齐鲁书社1993年11月。

田广金：「内蒙古中南部龙山时代文化遗存研究」、《内蒙古中南部原始文化研究文集》、海洋出版社1991年。

下へ向う斜面（路面）に石が敷かれている。

西台地の石城跡も不規則な形で、南北の長さが240 mで、東西の幅が50-120 mである。壁は台地の起伏に沿って建てられ、数行の石壁が並行するところがあれば、険しい石崖を利用して石壁が築かれないところもある。壁は厚さが一様でなく、1-1.2 mの間で、断面が台形になっている。西城跡南端の建築群遺跡はとりわけ注目される。南北80 m、東西30 mの範囲内に、東、南、西三面に石壁の跡が残されている。南壁の外に階段状の石や土で築かれた土手の壁がある。その壁内に小石で築かれた円形の積み上げが18個あって、南北一列になって、全長51 mになる。最も南ものは最大で、底の直径が8.8 mで、残りの高さが2.1 mある。ここから北へ17個あり、規模がほぼ同様に、底の直径が1.4-1.6 mの間にある。また最北にある二つの石積み上げの間に、順列からすこし離れたところに底の直径1.1 mの石積み上げはあり、その基礎部分が地下0.2 mに埋められている。これらの石積み上げは恐らく祭壇の遺跡ではないかと推測される。遺跡から24軒の家・220個の穴蔵・三基の墓が発掘され、遺物に動物の骨・石材及び骨材の道具などがあり、全部で1,600点にのぼる。石器の品種が多く、斧・刀・手斧・のみ・シャベル（スコップ）・ボール・凹形器・たたき器・皿状器・磨ぎ棒・砥石・臼・縫輪などがあり、石器の中では斧と刀が多数を占める。細石器が少なからずあり、生産用具の19%を占める。大型の石器も発見されている。ほかに土器、角製品、骨製品などの手工品がある。

人口の推定：

阿善遺跡は東、西二つに分けられているが、両者の距離が僅か250 mしかなく、集落の立地条件も同じであるため、これらを同一集落と見なすことができる。東、西両台地のいずれも不規則で、面積の計算はしにくい。大体東台地が31,200 m²で、西台地が12,000-28,800 m²くらいで、両者合わせて43,200-60,000 m²である。両者とも城壁に囲まれており、すべて明確な居住区と見なすことができるので、可能な人口数は1,000-2,000人と試算できる。

集落機能の推測：

この城跡の最も注目されるところは祭壇遺跡と見られる石の積み上げである。それは宗教か祭祀かの機能に関連するの間違いのないと思われる。問題はこの機能が「中心地機能」を持つかどうかのことである。つまり祭祀か宗教かの場所で営まれた活動は単に当集落の住民向けの宗教的機能であるのか、それとも周囲の集落にもこの宗教的機能が提供されることによって、集落がひとつの宗教的中心地となっているかの問題である。もしも後者であり、その他の非季節的集落機能をさらに加えると、都市と判断する可能性はある。しかしあくまで資料が不十分であるため、判断を留保する。

4. 板⁽¹⁰⁾城

板城城跡は内モンゴル自治区涼城県にあり、堤底川西側の東山の坂に位置している。西5

km離れた処に老虎山城跡がある。立地の坂がゆるめで、遺跡の北、西、南側が石の壁に囲まれている。かなり破壊されているが、断続する塀によって城跡の元の姿が大体想像できる。石壁は概ね台形となっており、北壁、西壁、南壁の残りの長さがそれぞれ188、146、130 mである。

板城城跡は老虎山城跡と同じように、城内の建物が列になって分布する。北西約180 mの処に東西方向の尾根があり、そこで五つの石の積み上げが発見されている。石の積み上げは東西方向にそって分布し、形が四角形で、辺の長さがほぼ同じく5.5 mである。石の積み上げ間の距離は20-68 mまでで、一致しない。一ヶ所だけは方位角が30°と傾く以外、すべて南北方向である。その中のひとつは小石で積み上げられており、中心部分が「十」字形となっている。「十」字形の中心に大きい石板が敷かれて、石板に赤紫色の焼き跡が残っている。これらの石積み上げは遺跡と同時代のもので、発掘者は恐らく祭壇の遺跡であると推測する。

人口の推定：

遺跡の面積は現在分かっている範囲で推測するしかできない。「概ね台形となっている」ということがすでにわかっているが、西の壁だけが比較的明確に146 m残り、面積は23,000 m²以上と推測される。その全てを明確な居住区と見なして、可能な人口数は570-780人になる。

集落機能の推測：

判断に資する資料が多くない。人目を引くのが祭壇の遺跡と見られる「十」字形通路のある小石積み上げである。しかしたとえそれは本当に祭壇の遺跡であっても都市であるかどうかの判断につながるとは限らない。なぜなら、一般的に、いかなる集落にも祭りか祭祀を営む建物があるからだ。問題はこれらの施設が中心地機能を持つかどうか、つまり、周囲の集落と共用のために設けられたものかどうかのことである。現段階ではこの点を証明できる資料がないが、集落全体の規模が大きくないので、都市と判断する可能性はとても少ないと思われる。

5. 園子溝⁽¹¹⁾

園子溝遺跡は内モンゴル自治区涼城県岱海の北岸にあり、園子溝村北の胡竜背山東坂の下に位置し、年代が竜山文化の初期に属する。この遺跡に石の城壁がない。報告者がこの遺跡を石壁のある「城跡」に似た集落の一つとして報告した理由は、地形が険しいため「壁を造る必要がないからだ」とする。筆者からすると、この指摘は大変意義があると思う。城壁があるかないかは集落性質の位置付けに根本的意義を持たないのである。山頂に岩石が露出し、平坦なところがなく、裏山が崖の絶壁で、とても険要な地形である。遺跡（山）の麓は広い河床で、地質調査によれば、当時岱海の水位が山麓まで達していたと分かる。このような三面が尾根、一面が水という険要な立地条件は壁を造る必要がない原因だと考えられる。台地東北側の坂の下に、幾重にも重なり合う「窯洞」があり、ゆるやかな坂に半竪穴式の建

物が多数分布している。かまどがすべては建物の近くで発見されている。これらのかまどは一つか二つで独立した作業場と考えられる。壁で鹿などが描かれた壁画も発見されている。また、園子溝遺跡から南 2 km の岱海の北岸に、東-西方向の山陵（梁）上に 23 個の石の積み上げがある。それらは東-西方向に一行に並び、中心から両側に向けて順次小さくなる。その構築方法は板城遺跡の四角形の祭壇に似ている。

人口の推定：

この集落は面積についての報告がないので、人口の推定ができない。

集落機能の推測：

特に「都市」と考えられる資料がないので、結論を避けたいが、都市である可能性はほぼないと思われる。

6. 大 廟 坡⁽¹²⁾

大廟坡城跡は内モンゴル自治区涼城县にあり、園子溝東 5 km の岱海の北側に位置している。遺跡の立地がゆるやかな傾斜地で、地形に沿った石壁が残存しており、長さ 100 m 余りある。

この城跡に関する資料は少なく、若干の壁がある遺跡の中の一つとして公表されただけである。この遺跡を本稿に入れたのは「城壁がある」からだという原因による。

人口の推定と集落機能の推測が全てできず、都市と認められる可能性は皆無に近いだろう。

7. 西 園⁽¹³⁾

西園城跡は内モンゴル自治区包頭市範囲内に位置している。城跡の立地は不規則な長方形の台地で、東-西約 150 m、南北約 90 m である。石の壁が台地の南西縁に築かれて、残存高さが 0.1-0.3 m で、基礎の高さが 0.7-0.8 m である。

人口の推定：

面積はおおよそ 13500 m² で、その全てを明確な居住区と見なして、可能な人口数は 330-450 人ぐらいである。

集落機能の推測：

資料が少ないため、判断しにくいですが、都市である可能性は非常に少ないと思われる。

8. 莎 木 佳⁽¹⁴⁾

莎木佳遺跡も内モンゴル自治区包頭市に位置し、東、西二つの台地に分けて、台地の上にそれぞれ石の壁が建てられている。

西台地の遺跡は東西の長さが 80 m 余り、南北の幅が 60 m 余りである。遺跡の中側で一つ大きい家の跡が発見されている。家の平面は長方形で、奥幅が 11.2 m あり、横幅が 26 m あ

り、門が南向きである。高さ0.2-0.35 m、幅0.5 mの壁が残されている。部屋の西北側にまた一つ奥行き4 m、幅3 mの小さい部屋がある。北壁側に奥4 m、幅4.5 mの内室がある。遺跡の南西方面に北から南へ順次小さくなる円形の土丘があり、1 mぐらいの間隔で並んでいる。北側の土丘は高さ1.2 mで、底と腰部に石で建てられた四角の枠があり、長さがそれぞれ7.4 mと3.3 mである。土丘は高さ0.8 mで、中心部に一面の小石が平らに敷かれている。南側の土丘は地面より僅かに高く、その基礎部を巻いた円形の石の輪があり、直径が1.5 mである。

東台地の状況は報告されていない。

人口の推定：

東西80 m余り、南北60 m余りの範囲すべてが石壁で囲まれていたかどうかは明らかではないし、よって4,800 m²の面積をもつ範囲は明確な居住区であるかどうか分からない。居住区範囲が明確と不明確という二つの計算方法で試算すると、可能な人口数はおよそ120 - 160人あるいは38-48人になる。

集落機能の推測：

報告された資料が多少詳しいものだが、1周の石の城壁がある以外に、城壁のない他の集落との間に特に違うところが見られない。その上規模も大きくないし、都市として認める可能性はほばないだろう。

9. 黒麻板⁽¹⁵⁾

包頭市の範囲内でこの時期の遺跡にまた黒麻板があり、台地の上に位置している。台地は東西110 m、南北70 mという規模で、周囲が石の壁で囲まれて、現在はこの石壁の基礎が残っている。北壁の中心部に幅2 mの扉（門）の跡があり、両側に四角形の礎石がそれぞれ一つ造られており、石壁に繋がる。北壁の近くに一つ東西の長さが52 m、南北の長さが25 m、高さが2.2 mという大規模な土台が残っている。土台の中心部に2個の「回」字形の石敷きがあり、真中に数枚の石板が敷かれている。足場の西側にまた1つ正方形の石敷きがあり、3.2 m²で、基礎高が0.4 mである。

人口の推定：

面積は7,700 m²で、その範囲全てを明確な居住区と見なして試算すると、可能な人口数は190-260人である。

集落機能の推測：

資料が少ないので、推測しにくい。祭祀類の跡があるが、集落の主要機能であるのか、あるいは複数の主要機能の中の1つであるのかが判断しにくい。たとえ主要機能であっても、現在知りうる報告に限って考え見ると、この集落は都市に判断される可能性がほとんどなく、せいぜい一つの準都市集落として認められる程度だと思われる。

10. 威俊⁽¹⁶⁾

威俊城跡は包頭市土默特右旗の西北部にあり、大青山の南麓台地に位置している。近くに土默川があり、遠くには黄河が見える。

報告によるとこの一帯は遺跡が密集して分布し、5 kmごとに一ヶ所あったり、数ヶ所組になって分布したりする。すべての遺跡に石の塼があり、その規模が小さくて、数千㎡から10,000 - 20,000 ㎡までである。城跡の立地はほとんど高く険しい山という地形である。城内には家屋の敷地あるいは石段式の祭壇があり、すべて軍事的防衛性質を持つ城跡であると見られる。威俊城跡に関して、報告によっては若干不一致があるので、ここにそれらの要点を抜き書きしておく。

劉幻真氏の報告によると、城跡所在の台地は東西方向で、長さ1,000 mぐらいで、総面積は40,000 ㎡である。二つの溝（谷）によって遺跡は三つの部分（三つのW）に分けられ、年代が阿善文化第三期で、「竜山文化初期に属する涼城老虎山第一期より時代がもっと早いので、仰韶文化時期の末期に属する」という。詳しい説明は次の通りである。

W 1：石の城壁があり、面積は18,000 ㎡である。壁は幅（厚さ）が1-1.2 mで、当初の高さが0.9-1.2 mと推測される。地形にそって上がったり下がったりして、平面が大体正方形である。「城内」に祭壇があり、大きさが5 ㎡、6 ㎡、5 ㎡の三つの建築物から構成され、南北一直線に並び、建築物間の距離はそれぞれ異なって、共に内外二重の石の枠がある。ほかに家の跡がある。遺物には石器、土器がある。

W 2：台地の平面は扇形で、面積は18,000 ㎡である。石の城壁があり、壁幅が（厚さ）0.7-0.8 mで、城の平面がヒョウタン形になる。ここにも祭壇があり、土丘のようで、底直径が12 mで、高さが1.5 mある。ほかには家の跡があり、土器、石器（石斧、石環）などの遺物がある。

W 3：台地の平面は不規則で、やや扇形となっている。南北の長さが120 m、東西の長さが30 mで、面積は3,600 ㎡である。石壁の幅（厚さ）が0.7-0.8 mである。ほかには家屋の跡があり、土器、石器（石斧のみ）がある。

上記の三つの台地の中で城壁内に祭壇があるのは二つの台地である。

「三つの地上建物は南—北方向でつりあいごとれて、同じ組の祭祀の遺跡に属すると考えられる」、また、「その時の宗教活動に、すでに厳格な組織と固定した形式があったと物語る」と指摘される。

田広金氏の論文には、次の通りである。⁽¹⁸⁾

(16) 劉幻真：「内蒙古包头威俊新石器时代建筑群址」、《史前研究辑刊》、1988年。

田広金：「内蒙古长城地带石城聚落址及相关诸问题」、《纪念城子崖遗址发掘60周年国际学术讨论会文集》、齐鲁書社1993年11月。

田広金：「内蒙古中南部龙山时代文化遗存研究」、《内蒙古中南部原始文化研究文集》、海洋出版社1991年。

(17) 劉幻真：「内蒙古包头威俊新石器时代建筑群址」、《史前研究辑刊》、1988年。

この城跡は東西に並ぶ三つの台地で構成され、（東西）長さが約1,500 mである。

V 1 台地の城壁は不規則な四角形で、長さ120 m、幅65 mで、約7,800 m²の面積がある。壁の残存高は0.4-0.8 mで、厚さが1-1.2 mである。台地の東南側に直線に並ぶ三つの土石の建物（J 1-J 3）があり、「祭壇の遺跡ではないか」と考えられる。J 1は北端の地面より4 m高い小さな丘に建てられ、円角の「回」字形の石の枠があり、外側が5×5 m平方で、内側が3×3 m²で、壁の幅が0.45 mである。中央部は小石が敷かれた円形の地面となっており、直径が1 mである。J 2はJ 1から150 m離れて、主体が円形土丘で、その底の直径が約22 mで、残存高さが約3 mである。丘の上部は6×6 m²の平らな台となっており、その外縁に沿って同じ面積（6×6 m）の四角形の石の枠が築かれ、土丘の中心部にもまた9×6 mの四角の枠が築かれている。土丘の切断面から、これは完全に人力で運んできた土で積み上げて建てられ、胴突きの痕跡がない。J 3はJ 2より北60 m離れた場所にあり、基礎が小石で建てられた長方形で、南北の長さが28 m、東西の長さが1.6 mの細長い形で、残存高さが0.7 mである。

V 2 台地は城壁がやや扇形となり、基礎幅が0.7-0.8 mで、壁内遺跡の面積は約8,000 m²である。台地の南西端に祭壇の跡があり、それは人力で積み上げたもので、残存の底直径が12 m、残存高さが1.5 mである。上部と中部にそれぞれ内外二重の「回」字形の石の枠がある。上部は石枠の中央に小石が敷かれるやや円形の平面があり、構造がV 1台地のJ 3と同じである。

V 3 台地の東、南、西三面の縁で城壁の基礎が発見されており、北側は険しい崖のため、壁の痕跡がない。家屋の跡が10数軒あり、台地の縁や斜面及び尾根に建てられ、地上式の石で築かれたものである。家屋は平面がすべて円角の四角形で、門の方向が南から東に偏り、面積は20-25 m²の間にある。遺跡中心部の尾根に北から南へと「一」字形に並ぶ家屋は五軒あり、北が高く南が低く、段階に分けて築かれている。すべての家の前に土手の壁があり、家の幅が7-8 mで、奥行きが5-6 mである。

上述の石の城跡はすべて阿善文化第三期に属し、C¹⁴データによれば、その年代の上限は4,800年前昔という。

人口の推定：

劉幻真氏の論文によると、三つの台地の総面積はおおよそ40,000 m²（18,000 m²+18,000 m²+3,600 m²）で、この区域全てを明確な居住区と見なして、可能な人口数は1,000-1,300人になる。

（田広金氏の論文によるとはV 3台地の面積数字が不詳であるので、総面積の計算と人口推算できない。）

✓ (18) 田広金：「内蒙古長城地帯石城聚落址及相关諸問題」、『紀念城子崖遺址发掘60周年国际学术讨论会文集』、齊魯書社1993年11月。

田広金：「内蒙古中南部龍山時代文化遺存研究」、『内蒙古中南部原始文化研究文集』、海洋出版社1991年。

集落機能の推測：

5 kmごとに一ヶ所があるほど分布が密集し、しかもよく組を組んで分布するため、「集落群」と言えよう。規模が数千㎡から10,000-20,000㎡まででそれほど大きくないし、皆石の壁があり、立地としては全て地形の傾斜度の高くて険しい山や崗にあり、石段式の祭壇があるなどということから、これらの集落は軍事的防御性質を持つと思われる。また、「建築物は南北のつりあいにとれており、同じ性質、同じグループの祭祀の遺跡に属すると考えられる」、「その時の宗教活動にすでに厳密な組織と固定化された形式があったことを意味する」などと指摘されるように、これらの特徴は、集落の機能の推測に役立つと思われる。つまりここは一組の軍事的あるいは宗教的関連機能が備わった集落の群である。その上、実際に集落群を構成する集落はこの三ヶ所だけに止まらず、多くの類似する集落が共同で構成した、かなりの規模を有する集落群だと考えられる。では、この集落群は都市として認められるか。理論上、「集落」と「集落群」とは異なる概念であって、普段、「都市」として認められるのが独立した集落である。一つの「集落群」の中で、中心集落は多様な集落機能を備えるので「都市」として認められる可能性が高い。しかし今のこの三集落は決して大きな相違がなく、どれが中心集落かは判断しにくい。報告者が指摘したように、このあたりには確かに大きい集落群が存在するかもしれないが、その中心集落はまだ発見されていないのではないかと考えられる。またその後たとえ中心集落が発見され（確認され）ても、都市であるかどうかは未知のことである。現在の知る限り、この三集落の遺跡は恐らく皆軍事類か祭祀類の集落機能を持っており、また推測されたように主に軍事的集落である可能性が高い。そうすると、集落が存在する当時、恐らく近くにある複数の類似した軍事的集落（三ヶ所が発見済み）と共同で、ある種の防御機能を果たしていたと考えられる。祭祀の機能については、恐らく単に各集落の独自の需要を満たすためだったと考えられる。今の段階では、この三ヶ所の集落が持つ機能は「中心地機能」だと認める証拠がないので、この三つの集落のいずれも都市として認めず、軍事集落の可能性だけが低い準都市集落として認める。

11. 砦子塔⁽¹⁹⁾

準格爾旗砦子塔城跡は清水川と黄河と合流するところ、黄河の岸边に位置している。立地環境は黄土の丘陵地帯であり、黄河がこの辺りで河床をより深く削るので、両岸が絶壁になっており、地形が険しい。石の城跡を有する集落が黄河岸边の高台地にたくさん分布し、砦子塔はの中で最も代表的な遺跡である。この城跡の東、西、南の三面は絶壁か急な斜面

(19) 魏坚：「准格尔旗寨子塔二里半考古主要收获」、《内蒙古中南部原始文化研究文集》、海洋出版社1991年。

田广金：「内蒙古长城地带石城聚落址及相关诸问题」、《纪念城子崖遗址发掘60周年国际学术讨论会文集》、齐鲁书社1993年11月。

田广金：「内蒙古中南部龙山时代文化遗存研究」、《内蒙古中南部原始文化研究文集》、海洋出版社1991年。

卢可可：「中国史前城址的区域与类型研究」、《中国历史地理论丛》1998年3期。

で、石壁がこのような地形に沿って起伏して建てられている。遺跡の北側はゆるやかで、平行する石壁が10-15 mの間隔で二つ建てられている。外側の壁は長さ142 m、内側の壁は長さ137 m、残存する高さが1 mぐらいである。壁は土の基礎の上に建てられ、基礎の幅が3.5-5 m、高さが1.8-3.5 mで、外側が深い溝となっている。内外の壁にて門の跡が発見されている。内壁の門は西向きで、幅が2.5 mであり、外壁の門は4 mの幅である。C¹⁴データによって、砦子塔城跡が建てられた年代はおおよそ4800年から4300年前だと分かる。

人口の推定：

遺跡の面積の報告がないため、人口を推定することはできない。

集落機能の推測：

関係する資料が上記のものしか報告されていないので、集落の機能も推測しにくい。判断を控えるが、立地から見れば前述の数ヶ所の遺跡と同じように、軍事的機能を持つ準都市集落ではないかと考えられる。

三 東北地域にある「城壁」集落

ここで言う東北地域は内モンゴル自治区の南東部及び遼寧省西部に接する西遼河流域（西拉木梭河、陰河、英金河及び大凌河流域）を指す。この地域では青銅器時代の城壁のある集落が多数発見され、ほとんどは夏家店下層文化に属している。

1. 東八家⁽²⁰⁾

赤峰東八家は赤峰市東北方面にあり、英金河北岸の山に位置している。坂の起伏にそって大きな石で囲まれた石の城壁で、平面は不規則で、東西140 m、南北160 m、面積は約22,400 m²である。城壁内の南側では66軒の円形の住居跡が発見され、多くは直径3 m-10 m、中心部の1軒は直径約40 mあって、先史時代の部落長の居住していた家ではないかと推測されている。城壁内では数多くの石器・土器などが発見され、主に農業用と生活用の器具である。

人口の推定：

城壁で囲まれる範囲の22,400 m²を明確な居住区と見なして、推測可能な人口数は560人-760人である。

集落機能の推測：

集落規模小さく、関連する資料が多くなく、主に農業用と生活用の器具が発見されたことから見れば、この集落は農業（採集業）以外の機能が見られない。都市である可能性はないと思われる。

(20) 佟柱臣：「赤峰東八家石城遺址勘查記」、『考古通訊』1957年6期。

2. 康家屯⁽²¹⁾

康家屯城壁は遼寧省西部北票市大板鎮康家屯村の北、大凌河南岸台地に位置して、「初めて発掘された夏家店下層文化に属す城壁集落である」。残念ながら城壁の北側がすべて大凌河に流されてしまって、残っている東・南・西面の城壁から、元々この城壁の平面は方形か長方形であったと推測される。南城壁135 mの長さから、仮に方形であった場合は面積約18,200 m²であると推測できる。城壁の幅は2-2.2 mで、内部が土と小石で築かれてから外側に厚く大きい石板で包まれており、15-20 mの間隔で「馬面」も発見されている。城壁の外側には上部幅7.5-8 mの壕があり、東城壁では幅1.7 mの城門も発見されている。城内では家及び石造りの壁が多数見物されている。これらの石壁が城内を幾つかの「区域」に区分しているようで、各「区域」内にすべて1ヶ所の直径10 mぐらいの大型円形建物があり、周りに若干の中型（直径約7 m）あるいは小型（直径約4 m）の建物がある。この城址は前期と後期に分けられることができる。後期の城壁は前期の城壁を石などで強化し、その結果、城壁の幅が約40 cm広がった。前期の家の入り口は西南方向に向くものに対して、後期の入り口は東か北に向かう。ほかに発見された物は土器・石器・骨器など、また散乱した人骨もある。

人口の推定：

仮に18,200 m²の範囲（面積）であり、すべて明確な居住区と見なすと、 possibleの人口数は450-610人と試算できる。

集落機能の推測：

関係する資料が上記のものしか報告されていないので、集落の機能も推測しにくい。立地から見ればこの辺りで発見されている多数の石城壁集落と同じく、単純な軍事守衛機能を中心とする集落の可能性が高く、準都市集落ではないかと考えられ、都市である可能性はないだろう。

3. 大甸子⁽²²⁾

大甸子遺跡は内蒙古自治区熬漢旗大甸子村東南方向の岡に位置している。城壁で囲まれた範囲は南北350 m、東西200 m、面積60,000 m²の楕円形である。城壁は土で築かれて、外には環濠が取り巻いている。環濠の外東側に同時期の墓地があり、804基の墓が発見され、頭はすべて北西に向いている。墓は3ヶ所に分かれて、総面積は城壁の規模と同じく60,000 m²に達する。遺物は主に墓地で出土したもので、土器がもっとも多い。青銅器の形に模した土器もあり、中原地域で発見された青銅器の形によく似ている。ほかには、石や玉及び青銅製の装飾具が発見されている。

(21) 辛岩・李維宇：「康家屯城址考古獲重大突破」、『中国文物報』1999年3期。

(22) 中国科学院考古研究所遼寧工作隊：「熬漢大甸子遺址1974年試掘簡報」、『考古』1975年2期。

劉觀民：「内蒙古赤峰市大甸子墓地述要」、『考古』1992年4期。

人口の推定：

60,000 m²の城壁内の面積であるから、すべて明確な居住区と見なして、 possible の人口数は1,500-2,000人と試算できる。

集落機能の推測：

関係する資料から見れば、長い歳月営まれた初期青銅器時代の規模の大きい農業集落ではないかと考えられる。農業以外の集落機能は今の段階では見えず、都市である可能性はほばないだろう。

4. 水 ⁽²³⁾ 泉

水泉遺跡は遼寧省建平県水泉村にあり、周りの平坦な地形より4 mくらい高い台地に位置している。土で築かれる城壁は南北約140 m、東西約135 m、面積は約20,000 m²である。城壁の断面は梯形で、底幅約9 m、高さ30 m残っている。城壁の外に環濠がある。半地下式及び地上式の住居跡133軒（下層120軒・中層13軒）及び墓18基（中層）が発見されている。F25の住居は土レンガで建てられた壁が一部残っている。遺物は生活用の土器及び農業・狩猟用の石器・骨器・青銅器がある。青銅器の種類が比較的多い。

人口の推定：

城壁内の面積は約20,000 m²で、すべて明確な居住区と見なすと、 possible の人口数は500-600人と試算できる。

集落機能の推測：

水泉遺跡は遼寧省西部及び内蒙古南東部で発見されている数多い青銅器時代初期の城壁を有する遺跡の中ではただ一つ平野で発見されたものである。これらの城壁のある集落は同じ夏家店下層文化に属しているが、山にある石造りの城壁集落は守衛などの機能を持つ軍事集落ではないかと考えられるのに対して、この平野に位置している水泉遺跡は農業・狩猟などの生産性機能を持つ集落ではないかと考えられる。つまり、立地環境の違いによって集落の機能も違うとも考えられる。この集落では農業・狩猟以外の集落機能が今の段階では見えず、都市である可能性はなく、準都市集落である可能性もほばないだろう。

5. 南 ⁽²⁴⁾ 梁

南梁石城跡は遼寧省阜新蒙古族自治县化石郷二色村下新屯の東南丘陵上に位置している。標高340 m、自然地形にあわせて石壁が作られ、全体が卵形に近い平面で、南から北へ、

(23) 遼寧省博物館・朝陽市博物館：「建平水泉遺址発掘簡報」、『遼海文物学刊』1986年2期。

(24) 岡村秀典：「遼寧省阜新県南梁石城遺跡考古測量調査」、郭大順・秋山進午共編：『東北アジアの考古学研究』、同朋社出版1995年2月。

徐光冀：「赤峰英金河、陰河流域の石城遺址」、『中国考古学研究』、文物出版社1986年。

東から西へと緩やかに傾斜し、良好な状態で残されている。南北に走る屋根筋に東西石壁をあわせ、丘陵の西斜面を囲むように石壁をめぐるせて、石壁の外側で計測されて、南北最大が196 m、東西最大長さが124 mあると報告されている(遺跡全体の面積は24,300 m²以下)。城内に石の集積(石の山)があり、これはこの種類の石城での普遍的な現象である。また、石壁の外側に「馬面」も確認され、門の跡ではないかと考えられる城壁の欠口も発見されている。東、北、西の三方を深い谷にかこまれたこの石城は、天然の要害と呼ぶにふさわしいと指摘されている。

人口の推定：

仮に24,300 m²の城壁内の面積であり、すべて明確な居住区と見なすと、人口数は600-820人以下と試算できる。

集落機能の推測：

関係する資料が限定されているので、集落の機能も推測しにくい。立地から見ればこの辺りで発見されている多数の石城壁集落と同じく、単純な軍事守衛機能を持つ集落の可能性が高く、準都市集落ではないかと考えられる。都市である可能性はないだろう。

6. 平頂山⁽²⁵⁾

平頂山石城壁は遼寧省阜新蒙古族自治县紫都台双井子村平頂山近く、邨牛河支流の東岸丘陵の先端に位置している。立地条件は上述の南梁遺跡と似ている。遺跡全体は不規則な長方形を呈し、南北が約430 m、東西は南側で150 m、北側で80 mある(面積は約49,500 m²)。城壁内はかなり平坦であり、北方を見渡せる絶好の場所にあり、自然地形をたくみに利用した防衛施設であると考えられる。

人口の推定：

仮に49,500 m²の城壁内の面積であり、すべて明確な居住区と見なして、人口数は1,230 - 1,680人と試算できる。

集落機能の推測：

関係する資料が少ないので、集落の機能も推測しにくい。立地から見ればこの辺りで発見されている多数の石城と同じ、軍事守衛機能を中心とする単純軍事的機能を持つ集落の可能性が高く、単純な軍事守衛機能を持つ集落の可能性が高く、準都市集落ではないかと考えられる。都市である可能性はないだろう。

(25) 遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古学系：「遼寧省阜新平頂山石城址発掘報告」、『考古』1992年5期。

岡村秀典：「遼寧省阜新県南梁石城遺跡考古測量調査」、郭大順・秋山進午共編：『東北アジアの考古学研究』、同朋社出版1995年2月。

7. 城子山⁽²⁶⁾

城子山石城跡は遼寧省凌源県三官甸子村東北約3kmの山の尾根に位置している。山は険しいものではなく、城壁は山頂の平坦面に建てられている。西壁長さ120m、幅6mで、北壁と南壁とも残長60mある。城壁全体は「コ」の字形を呈し、三辺ともほぼ直線をなす。「各地の城塞で、この城子山のごとく幾何学的な形態をとるものは、むしろ少ないのではないか」と研究者が指摘する⁽²⁷⁾。城内では夏家店下層文化の半地下式の住居址が発見されている。

人口の推定は集落の面積が分からないため、人口数の試算はできない。

資料が少ないので、集落の機能も推測しにくい。立地から見ればこの辺りで発見されている多数の石城壁と同じ、軍事守衛機能を中心とする単純軍事的機能を持つ集落の可能性が高く、単純な軍事守衛機能を持つ集落の可能性が高く、準都市集落ではないかと考えられる。都市である可能性はないだろう。

上述のほかに、赤峰市の近くの英金河、陰河流域では43ヶ所の夏家店下層文化に属する同類の石城壁が発見されているとの調査報告は1986年に発表されている⁽²⁸⁾。その中、発掘が行われて、面積及び地形図だけが発表されているのは新店石城壁（10,000㎡）と西山根石城壁（10,000㎡）及び大榆樹石城壁がある。報告が簡略なので、ここでの検討は省く。

また、1998年、陰河流域で発見されている夏家店下層文化に属す同種類の石城壁の67ヶ所が報告されている⁽²⁹⁾。位置、標高、面積、周りの環境、内部の様子などの報告は次の通りである。非常に簡単なので、人口の推算及び集落機能の推測は省く。

1 西頭山

西頭山石城は陰河と支流間の山坂に位置している。標高700m、幅6m、長さ52mの石壁が残っている。城内では石の山（集積）が発見されている。遺跡全体の面積5,110㎡で、城壁の範囲（面積）は分からない。

2 遺跡2号

所在場所は報告されていない。標高は700mである。城壁に関する報告はない。

3 三座店

三座店石城は西側と南側に陰河、東側に陰河の支流の大莫胡溝川に面する山に位置している。標高700m、面積13,550㎡である。残っている北石壁は長さ135m、底幅4m、東石壁

(26) (27) 秋山進午：「遼寧省阜新県凌源県三官甸子城子山石城遺跡考古測量調査」、郭大順・秋山進午共編：『東北アジアの考古学研究』、同朋社出版1995年2月。

(28) 徐光冀：「赤峰英金河、陰河流域の石城遺址」、『中国考古学研究』、文物出版社1986年。

(29) 王惠徳・薛志強・吉迪・劉景嵐：「陰河下游石城の調査与研究」、『昭烏達蒙族師專學報』19巻4期（1989年）。

は幅6.6 mの「馬面」構造がある。城内では42棟の円形の住居跡が発見され、石の積み上げもある。

4 三座店東梁

上述の三座店石城の東側の山稜に位置している。標高710 m、面積10,000 m²である。東西方向平行で4つの城壁が発見され、残っている長さは50 m、93 m、87 m、105 mある。東城壁は長さ150 m、基礎幅6 mある。遺跡の中心部に直径7 mの石の集積がある。

5 三座店東梁東南

上述の三座店石城東梁より東南方向陰河に面する山坂に位置している。標高700 m、面積6,370 m²である。遺跡の北側に63 mと62 m長さの二重城壁がある。城内では62軒の円形住居跡が発見され、その中の36軒は中心部の面積の大きい「平台」にある。これらの家の平均内径は3.12 mである。

6 遺跡6号

所在場所は「陰河より340 m」と報告されるだけで、標高750 m、面積6,780 m²である。南側は断崖で、他の三面は城壁があり、北壁は残り5 m、残高1.5 mである。円形の住居址が33軒発見されている。

7 遺跡7号

所在場所は報告されていない。標高710 m、面積1,090 m²である。断崖に繋がる長さ59 mと18 mの二つの城壁が残っていて、幅は僅か1.5 mである。

8 遺跡8号

所在場所は「陰河より440 m」と報告されるだけで、標高730 m、面積1,830 m²である。南西側は陰河に面する断崖で、他の三面は馬蹄形の城壁で囲まれている。城内では20軒以上の住居跡が確認されている。城内の東南側に大型の石の集積がある。

9 遺跡9号

遺跡は陰河に突き出している2つの山の上（山稜）にあり、陰河より570 mで、標高720 mで、面積36,360 m²である。南北方向と東南側に2つの城壁があり、間の距離は22 mで、長さは2つとも50 mで、最大の幅は6 m以上がある。城内にはまだ小さい「城壁」が幾つか平行分布している。城内では89軒の住居跡が発見され、主に南側に分布している。

10 大河東村遺跡

大河東村の南の小山に位置している。標高690 mで、面積1,900 m²である。遺跡の東側に長さ25 mの石の城壁が発見され、いくつかの円形住居跡も発見されている。

11 西山根

60年代に発掘された遺跡である。陰河支流の老頭子溝に突き出している山の南坂に位置している。標高750 mで、面積7,940 m²である。西北側は断崖で、他の方向はすべて幅3 mの城壁で囲まれている。東北城壁の外側は間隔20 mで半円形の「馬面」が造られている。城内

で40軒余りの住居跡が発見され、中心部は馬蹄形の「平台」である。

12 西山根東北

西山根遺跡の東北側、老頭子溝と陰河の合流するところに位置している。標高700 m、面積5,690 m²である。225 mと75 mの長さで二ヶ所の城壁が残っている。城壁の間に石の集積がある。

13 遺跡13号

陰河より640 m離れているところの断崖の上に位置している。標高は750 mであり、面積の報告はない。遺跡東側及び東北側の城壁は幅5 m、残高6 mである。この城壁から28 m離れたところに、もう一つの城壁があり、「城門」と考えられる幅6 mの明け口もある。この石城から西北方向70 m離れたところにまた小さい石城があり、長さ40 m、幅20 mの長方形石城である。

14 下机房営子

下机房営子村北側に位置している。南側は陰河に面し、険しい断崖がある。標高740 m、面積2,310 m²である。東側と北側に石の城壁があり、城壁の最大幅は3.5 mある。20軒の円形の住居跡が発見されている。

15 遺跡15号

陰川に近い山坂に位置している。標高750 m、面積2020 m²で、馬蹄形の城壁が残っている。6軒の住居跡が発見されている。

16 遺跡16号

所在場所は報告されていない。険しい坂に位置している。標高750 m、面積25,320 m²で、二つの城壁が残っている。城壁の幅は5 mあり、城壁の間の距離は60 mある。円形の住居跡が発見されている。

17 遺跡17号

陰川より330 m離れた断崖に位置している。標高750 m、面積3,340 m²である。城壁幅は6 mある。円形の住居跡が発見されている。

18 遺跡18号

陰川台地の南西側の坂に位置している。標高は750 mであり、城壁に関する報告はない。

19 康家湾西北

山坂に位置している。標高720 mである。遺跡の面積は14,400 m²あるが、城壁に関する報告はない。

20 康家湾南

陰川に面する崖に位置している。標高700 m、面積は報告されていない。発見されている城壁は長さが84 mあり、幅が2 mある。

21 遺跡21号

陰川に近い崖に位置している。標高は750 mであり、面積の報告はない。城壁は発見されていない。

22 遺跡22号

遺跡23号標高750 m、面積5,750 m²である。城壁は幅が6.5 mある。16×20 mの「台」が発見されている。

23 遺跡23号

陰川に近い崖に位置している。標高770 m、面積750 m²である。城壁は幅が0.6 mあり、残っている高さが1 mである。

24 鄒家営

陰川に近い山坂に位置している。標高800 m、面積40,530 m²である。二つの城壁が発見され、城壁の間の距離は15 mある。石の積み上げがある。

25 遅家営

陰川の二つの支流が交差する岸に位置している。標高800 m、面積85,640 m²である。城壁は幅が6-10 mあり、城壁の外側に半円形の「馬面」が発見されている。

26 遅家営西北

険しい坂に位置している。標高810 m、面積2,280 m²である。城壁は今の高さが10ある。三軒の円形の住居跡が発見されている

27 遅家営東北

標高は770 mであり、城壁に関する報告はない。

28 遺跡28号

山の南坂に位置している。標高740 m、面積8,700 m²である。北側に二つの城壁があり、城壁と城壁の間の距離が61 mである。内側の城壁の近くに27×22 mの建物の「台」があり、この近くに直径14 mの住居跡が発見されている。

29 遺跡29号

山の東南坂に位置している。標高750 m、面積8,680 m²である。11 mの長さの城壁が発見されている。

30 平房村東北

陰川に近い山の南西坂に位置している。標高750 m、面積6,270 m²である。二つの城壁が発見されている。二重城壁の間に壕があり、城壁と城壁との距離が21 mある。

31 遺跡31号

陰川の支流の紅土溝沿いに位置している。標高は800 mであり、面積の報告はない。城壁が発見されているが、詳しい報告はない。

32 榆樹底

陰川より540 m離れた崖に位置している。標高770 m、面積8,950 m²である。遺跡の北側に

アーチ形の二つの城壁が発見されている。城壁の幅が5 mあり、二重城壁の間の距離が20 mである。半円形の「馬面」も発見されている。

32-2号遺跡

陰川の谷に位置している。標高800 m、面積5,000 m²である。遺跡の東北及び南西側に城壁が発見されている。

33 北山根

小山の南西坂に位置している。標高800 m、面積7,130 m²である。二つの城壁が発見され、その間の距離が27 mである。「台」状の建物が発見され、円形の住居跡も多数発見されている。

34 遺跡34号

小山の上に位置している。標高810 mで、面積と城壁に関する報告はない。

35 鉄家営溝

陰川支流の鉄家営溝の西岸に位置している。標高790 m、面積12,000 m²である。城壁に関する報告はない。

36 鉄家営溝北

小山の南東の坂に位置している。標高800 m、面積10,250 m²である。城壁は発見されている。

37 遺跡37号

小山の南東坂に位置している。標高800 m、面積500 m²である。城壁のような遺跡が発見されている。

38 孤山子

孤山子という名前の山に位置している。標高750 m、面積14,850 m²である。城壁は発見されているが、詳しい報告がない。

39 城子山

陰川の崖に位置している。標高840 m、面積34,160 m²である。三重の城壁が発見されている。外城の壁は幅が6 mあり、現存の高さが2-3 mあり、外側に「馬面」がある。中城壁は幅が3-4 mで、外城壁との距離が120 mある。内城壁は幅が3-4 mで、中城壁との距離が20 mある。円形の住居跡は100軒も発見され、最大14×13 mの規模である。

40 遺跡40号

陰川の崖に位置している。標高840 m、面積1,790 m²である。城壁は幅が2 mあり、他の報告がない。

41 老頭子

山に位置している。遺跡が石材を取る工事によって壊されたため、「残っている面積は2,800 m²である」ということだけで、ほかの報告がない。

42 福山荘

山岡に位置している。標高 690 m で、面積と城壁に関する報告はない。

43 遺跡 43 号

山岡に位置している。面積は $76 \times 34 \text{ m}^2$ で、五つの石の積み上げがある。ほかの報告はない。

44 硯台山

陰川の岸に位置している。標高 750 m、面積 $48,840 \text{ m}^2$ である。遺跡の南側に 330 m の長さの城壁が発見されている。円形の住居跡がある。

45 遺跡 45 号

陰川の南岸に位置している。標高 700 m、面積 $6,240 \text{ m}^2$ である。城壁は二つあり、城壁の間の距離が 21 m ある。

46 半支箭西南

陰川に面している坂に位置している。標高 740 m、面積 $2,800 \text{ m}^2$ である。城壁は発見されていない。

47 小敖包山

陰川沿いの山岡に位置している。標高 710 m、面積 $20,280 \text{ m}^2$ である。遺跡の北側に二重の城壁が発見されている。

48 馬架子

山の上に位置している。標高 760 m で、面積の報告はない。短い城壁が発見されている。

49 遺跡 49 号

山の南坂に位置している。標高 760 m、面積 $1,890 \text{ m}^2$ である。「城壁を持つ遺跡である」ということだけで、ほかの報告がない。

50 遺跡 50 号

険しい山に位置している。面積は $37,370 \text{ m}^2$ とあり、標高の報告はない。山の頂上に城壁が発見され、「馬面」もある。

51 遺跡 51 号

険しい山坂に位置している。標高 750 m、面積 $1,160 \text{ m}^2$ である。城壁は僅かの痕跡が発見されている。

52 遅家営西南

陰川岸の崖に位置している。標高 770 m、面積 $5,870 \text{ m}^2$ である。城壁と「馬面」が発見されている。

53 温家地後山

陰川に近い山の上に位置している。標高 900 m、面積 700 m^2 である。一つの城壁及び三軒の円形の住居跡が発見されている。

54 遺跡 54 号

陰川南岸の崖に位置している。標高760 m、面積5,190 m²である。遺跡の周りに城壁があり、遺跡の東南側に21×10 mの「台」がある。

55 温家地

険しい坂に位置している。標高1,050 m、面積15,200 m²である。遺跡の南・西・北の三面に城壁があり、西北側に60×10 mの「台」がある。

56 温家地北

坂に位置している。標高1,000 m、面積4,550 m²である。周りに城壁があり、遺跡の中心部に22×17 mの「台」がある。

57 遺跡57号

山坂に位置している。標高900 m、面積8,920 m²である。城壁及び「馬面」が発見されている。

58 広府宮子西南

西溝と陰川の交差するところの山に位置している。標高750 m、面積34,000 m²である。城壁は遺跡の南側で発見され、幅が最大10 mある。

59 疣塔山

于洪溝西側の高地に位置している。標高870 m、面積10,680 m²である。城壁はほぼ原型を留めている。遺跡の北側、中心部、南側にそれぞれ数多い住居跡が発見されている。

60 疣塔山南

標高860 m、面積1,540 m²である。「遺跡の南側に一つの城壁がある」という報告がある以外に、ほかの報告がない。

61 遺跡61号

疣塔山南遺跡に近く、小さな川の向かい側に位置している。標高850 mであり、石の積み上げが発見されているとの報告だけで、面積と城壁の詳しい報告はない。

62 遺跡62号

疣塔山遺跡から南1,000 m離れた山に位置している。標高1,020 mであり、面積と城壁の報告はない。

63 薛家地

陰川より540 mの場所に位置している。標高760 m、面積5,000 m²ある。城壁に関する報告はない。

64 薛家地南

陰川より500 m離れる山坂に位置している。標高は750 mであり、面積と城壁の報告はない。

65 遺跡65号

薛家地に近い陰川の崖に位置している。標高770 m、面積16,000 m²である。城壁に関する報告はない。

66 幹溝子

山に位置している。標高 800 m で、面積の報告がない。城壁は二つあり、幅が 7 m ある。20×15 m の建物の跡がある。

67 肖家溝

陰川支流の肖家溝の東岸に位置している。標高 770 m、面積 21,400 m² である。城壁は不規則な楕円形を呈し、幅が 4-5 m ある。

上記のものだけに止まず、遼寧西部及び内モンゴル東南部で同種類の石城壁遺跡の数は百ヶ所を超えていると最近徐光冀氏が談話を発表した。⁽³⁰⁾

言うまでもなく、これらの石城壁については、分布の特徴・各遺跡の実態・相互の関連・周囲ほかの同時期住民集団（異なる考古学文化）との間の関係など、研究すべき問題は多く、「まだまだ課題が山積している」⁽³¹⁾。それらの課題を研究するため、その第一歩としては詳しい資料の発表が望まれている。

四 青海高原にある「城壁」

上述の陰河流域で発見された城跡と同じように、これから述べる青海省にある 4ヶ所の青銅器時代の城壁を持つ遺跡も、「都市」という言葉を連想させることがなく、ただの「城壁（塼）のある」遺跡である。

1. 下石城⁽³²⁾

下石城遺跡は青海省湟中県に位置している。90,000 m² の面積で、卡約文化と唐汪文化時代の遺物がともに発見されている。遺物包含層が 1.2-1.5 m の厚さ（積み上げ）で、「石壁の遺跡が露見している」という。

人口の推定：

石壁の範囲と遺跡面積との関係は明確に報告されていない。恐らく 90,000 m² とは遺跡の範囲で、この遺跡範囲の中に石の壁があると理解されるだろう。そうすれば、90,000 m² の面積は非明確な居住区であり、人口の数が 720-900 人と推測できる。

集落機能の推測：

関連する資料が少なすぎて、集落の機能を推測することはできない。他の同類遺跡の資料からも、多様な集落機能の現象が見られない。判断を控えるが、都市どころか、準都市集落

(30) 2002 年 11 月 24 日、「中国考古学」ホームページ (<http://www.kaogu.net.cn/>) による。

(31) 岡村秀典：「遼寧省阜新県南梁石城遺跡考古測量調査」、郭大順・秋山進午共編：『東北アジアの考古学研究』、同朋社出版 1995 年 2 月。

(32) 国家文物局主編：『中国文物地図集・青海分冊』の「文物単位簡介」33 頁。

の可能性もほぼないと思われる。

2. 月落石⁽³³⁾

月落石遺跡は青海省海晏県に位置している。10,000 m²の遺跡面積で、卡約文化時代に属する。遺物包含層の厚さが不明で、「円形の家屋の居住部分（床）及び石の壁などの遺跡が発見されている」という。

人口の推定：

石の壁があるが、前の湟中下石城と同じように石壁の範囲と遺跡面積との関係は明確に報告されていない。遺跡範囲の中に石の壁があると理解し、10,000 m²の範囲を非明確居住区と見なし、推測される人口数は80-100人になる。

集落機能の推測：

前の湟中下石城と同じように、関連する資料が少なすぎて、集落の機能を推測できない。ほかの同類の遺跡資料からも、多様な集落機能の現象が見られないので、都市どころか、準都市集落の可能性もほぼないと思われる。

3. 沙柳河⁽³⁴⁾

沙柳河遺跡は青海省剛察県に位置している。面積は8,000 m²ぐらいで、卡約文化と唐汪文化に属する文化包含層の厚さ（積み上げ）が0.4 mで、「灰坑、石壁の遺跡が露見している」という。

人口の推定：

8,000 m²の面積を非明確居住区と見なすことしかできないので、推測される人口数は60-80人である。

集落機能の推測：

前の二ヶ所と同じように、関連する資料が少なすぎて、集落の機能を推測することができない。ほかの同類の遺跡資料からも、多様な集落機能の現象が見られないので、都市か準都市の可能性はほぼないと思われる。

4. ザカワラ⁽³⁵⁾

ザカワラ遺跡は青海省剛察県に位置している。16,500 m²の面積で、卡約文化時代に属する。遺物包含層が0.6 mの厚さで、「石壁の遺跡が露見している」という。

人口の推定：

16,500 m²の面積を非明確な居住区と見なすと、推測される人口数は130-160人である。

(33) 同上、125頁。

(34) (35) 同上、127頁。

集落機能の推測：

集落の機能を推測することができないが、多様な集落機能が見られないので、上述の遺跡と同じように、都市か準都市の可能性がほぼないと思われる。

五 結 語

これまで述べてきたのは中国北方の三つの地域で発見されている「城壁」を持つ先史集落であり、全部で89ヶ所ある。その中で「都市」として認められるものはなく、都市である「可能性がある」に止まるものは数ヶ所ある。しかし多くの遺跡は「都市」という言葉を連想させるものではない。また、内モンゴルにある涼城園子溝遺跡のように城壁がなくても、石壁のある「城跡」に似た集落の一つとして扱われる例もあった。

これらの先史時代の城壁集落の年代は、新石器時代の後期（竜山文化時代）から青銅器時代の後期（唐汪文化時期）まで亘っている。詳しい年代のデータ（C¹⁴データ）が少ないが、紀元前26世紀ごろ（山西省にある竜山文化の最初のC¹⁴年代を参照）から紀元前7世紀ごろ（唐汪文化の遅いC¹⁴年代を参照）に亘り、約2,000年の幅がある。

本稿の検討で中国北方にある先史「城壁」集落に対して、次のようないくつかの認識を得たと思う。

立地環境について。

内モンゴル南部地域と中国東北部地域で発見されている城壁集落の立地環境は一致している点がある。集落の多くは石で築かれ、海拔の低い山の上に位置していることは共通の特徴であり、また、農業と牧畜業の交差する地域に位置していることも注目するところである（この点は後でまた検討する）。青海高原で発見されている城壁集落の立地環境は資料不足のため検討ができない。

集落の規模について。

面積データのあるものを見ると、内モンゴル南部地域では最大は130,000 m²（涼城老虎山）で、最小は4,800 m²（包頭莎木佳）である。東北部地域では最大は60,000 m²（阜新平頂山）で、最小は20,000 m²（建平水泉）である。青海高原では最大は90,000 m²（湟中下石城）で、最小は10,000 m²（海晏月落石）である。集落の規模はすべて大きくないことが特徴である。

集落の人口について。

内モンゴル南部地域では最も多いのは3,200-4,400人（涼城県老虎山遺跡）で、最も少ないのは120-160人（居住区範囲が明確として試算）であるか、あるいは38-48人（居住区範囲が不明確として試算）である（包頭市莎木佳遺跡）。東北部地域では最も多いのは1,500-2,000

人（熬漢旗大甸子）で、最も少ないのは450-610人（北票県康家屯遺跡）である。青海高原では多いのは720-900人（湟中県下石城遺跡）で、少ないのは60-80人（剛察県沙柳河遺跡）である。

集落の機能について。

前も述べたように「都市」として認定されるものはない。都市である「可能性」があるものは内モンゴル南部地域の3ヶ所である（涼城老虎山・涼城西白玉・包頭阿善）が、今しばらく判断を留保したい。そのほか、数ヶ所の農業・狩猟集落であるとするものを除いて、内モンゴル南部地域及び東北部地域の大部分の城壁集落は準都市に属すべき軍事守衛集落ではないかと考えられる。青海高原にある城壁集落は資料が少ないため、集落の機能を推測することができない。

内モンゴル南部にある城壁集落のほとんどは防衛要塞的な軍事集落である可能性が高いと考えられる。もしこの考えが正しいならば、これらの軍事要塞の「防衛」の対象は北側（内モンゴル高原側）にあるのではないかと考えられる。この辺りは農業と遊牧の交錯する地域で、有史年代になって築かれ始めた万里の長城の延びている地域の近くにあり、歴史上、遊牧民族と農耕民族の間の戦争の頻発地域でもある。前も述べたようにこれらの城壁を持つ先史集落の年代は大体黄河流域の竜山文化時代に相当するものである。黄河流域の竜山文化時代は狩猟・採集農業から定住農業に転換しつつある時代であることは学界の一般的な認識であるため、これらの城壁を持つ先史集落も同じように定住農業に転換しつつある集団（部族？・民族？）に属される集落である可能性が高いと認識しても間違いがないだろう（「証拠」としての発掘資料はまだ不十分であるが）。そうであるならば、これらの城壁を持つ「防衛集落」は、後代（有史年代）にこの地域で多発していた遊牧民族と農耕民族の間の争いが先史時代から既に始まっていたと物語っているのではないかと考えられるだろう。

東北地域で発見されている城壁集落の数は非常に多い。これらの集落の多くは高くない山の上に位置し、軍事要塞的な「防衛集落」であることは内モンゴル南部で発見された集落に似ている。ただし、同じ「防衛集落」であっても、「防衛」の対象は同じ北側（内モンゴル高原側）にあるかどうかは検討すべき問題である。有史年代の事例から見れば、この地域で発生した「歴史的イベント」が上記の内モンゴル南部地域より少なく、この辺りは有史年代になって築かれた万里の長城の延びている地域でもない。この地域で先史時代の城壁を持つ「防衛集落」の大量発見という事実に対して、どのように理解したら良いのか。この問題は簡単に答えられないが、次のように推測できるだろう。

この地域では新石器時代繁栄期（中期）に属している初期農業を営む紅山文化も分布している。また、今検討している城壁集落が青銅器時代の夏家店下層文化に属しているとは前述

(36) 『中国大百科全書・考古学』571頁、中国大百科全書出版社、北京・上海1986年。

べたが、この夏家店下層文化も主に「定住農業」を営んでいたとの指摘がある。⁽³⁶⁾もしこの指摘が正しいならば、これらの「防衛集落」は内モンゴル南部にある城壁集落と同じように、農業を営む集団（部族？・民族？）に属するものであると考えるべきだろう。この辺りより北へ向かうと、内モンゴル高原であり、今日の自然環境から見てもこの地域は伝統的な農業と牧畜業の交差する地域である。また、考古学発見の例から見ても、この辺りから北側の内モンゴル高原へ向かうと、先史時代の定住農業を営む集落の遺跡の発見がだんだん少なくなる。ここから見れば、この地域の自然環境は、先史時代から今まで変わっていないようである。そうすると、これらの先史時代の城壁を持つ「防衛集落」の防衛する対象も北側（内モンゴル高原側）にある遊牧民族であると考えても間違いがないだろう。つまり、歴史年代における文献記録は少ないが、遊牧民族と農耕民族の間の争いが先史時代からこの地域で既に展開し始めたと考えることもあり得るだろう。

本稿で検討した上記の先史時代の城壁を持つ集落は年代の幅が広く、広大な地域に亘っている。これらの城壁集落は別々の独自の発展によって出現したものではないかと考えられ、この三つの地域の間には互いの影響があるとは言えないだろう。ただし、新石器時代から青銅器時代に亘って、それぞれの地域で時代の流れによって、先後の違いがあっても文明時代に入る前にそれぞれの形の「城壁」が出現した事実はある種の必然ではないかと考えられる。

言うまでもなく、各地域で発見されているこれらの先史時代の「城壁」を持つ集落については、各地域での分布の特徴・各遺跡の実態・相互の関連性・周囲の同時期住民集団（違う考古学文化）との間の関係など、研究すべき課題はまだ多い。本稿の検討はこれらの課題を解決するための小さな試みに過ぎない。

